



モスク

○キリスト教と隊員の意外な関係

そこにキリスト教徒がいるかいないかを見極める手がかりとして、「豚の有無」があります。イスラム教徒にとって豚を食べることは禁忌です。そこら辺に豚がうろついている村では、その豚を飼っているだれかはキリスト教徒、ということになります。「そこにキリスト教徒がいるかどうか？」と言うのは、一見どうでもよいことのように思われるかも知れませんが、われわれ隊員にとって、実は重要なポイントです。なぜなら、そのキリスト教徒の家でビールが買えるかも知れない!?からです。

国民のほとんどがイスラム教徒であるため、農村部では、おおっぴらにアルコールを売り買いすることはできません(都会では全く問題ありませんが)。しかしながら、キリスト教

徒の中には、自宅でビールを売っている人がいるのです。特に「ビール有ります」のような看板が立っている訳でもなく、どこから見てもただの民家です。その家の門を叩き、出てきた家の人に「ビールを売ってくれ」と言えば、奥からビールを持ってきてくれます。たいていはその家の中庭で、酒好きなセネガル人がひっそり楽しんでるのが見られます。

イスラム教にとって酒は禁忌ですが、かと言って、違う宗教の人々が飲んでいる分には余り気にならないようです。私も時々自宅飲んでいましたが、「お酒は体によくないんだよ」と軽く咎められるくらいでした。しかし中にはやつぱり、「酒を飲むなんてけしからん!」と怒る知り合いもいました。

○都市と農村

セネガルの首都はダカールと言い、首都ダカールとその他いくつかの都市ではかなり都市化が進んでいます。電気、上下水道も整備され(しばしば断水しますが)、道路も舗装されています。特に首都の都市化は著しく、10階建て以上のビルがいくつもあります。しかし、ちよつと街を離れると、突然画面が切り替わるように、荒涼たる大地が延々と続きます。

セネガルの国土は、東の端の一部を除いて真っ平で、山一つありません。木々もまばらに生えているだけです。視界を遮るものはほとんどなく、360度の大パノラマです。

ただ一本の国道だけが、信号も交差点もなく、何十キロも続いています。車で走っていると、だいたい5キロおきくらいに村が現れます。道路の両端に建物と、行き交う人々、家畜の姿が見られます。もちろん村の規模はまちまちですが、500mほどそんな景色を見た後、また唐突に家が切れて、元の荒涼とした大地に戻ります。



荒地

例えば松前町と松山市、あるいは伊予市は、境界線によって区切られています。境界線と言っても、行政区画上の線であって、実際には「よこそ松前町へ」の看板が目印になっているだけです。もちろん密度の違いはありますが、「町」―すなわち人の生活圏は、どこまでも一様に広がっています。

しかしセネガルでは、明確に生活圏の境界がはつきりと、見て取れません。「ここが村の外れ」というのが一目で判ります。つまり、セネガルに

おいては、「サマキ村」と「マヤツマ村」との間には、数キロもの「村ではない場所」―生活圏ではない場所が広がっているのです。そのため、セネガルの地図では、州やそれに順ずる境界は、「線」で表現されますが、村は「点」で表されます。ちょうど、電車の路線図のようなイメージです。

○任地へ

さて、首都ダカールから南東に向かつて、車で(早くて)3時間走ると、カオラック州というところに入ります。「州」は、日本でいう「県」に当たります。そこから車を乗り換えて2時間、カオラック州の中のパオスコト郡―その郡庁がある「パオスコト村」が、私の任地、つまり2年間、活動し生活した場所でした。「愛媛県伊予郡松前町」から、「カオラック州パオスコト郡パオスコト村」に、時差9時間の大引越しです。

「郡庁所在地」ともなると、村とはいえ、結構大きいのではないかと、お思いになるかも知れませんが、いえいえ、とんでもない!

パオスコト村は、「郡庁」という名の建物が立っている以外は、他に何百もある小さな村と全く変わらない村でした。

次回は、農村部に住む人々の生活、その人となりについて、そして、そこに隊員として派遣された日本人(つまり私)が、どのように彼らと接し、生活して来たかについて、ご紹介したいと思います。